

モンゴル民族の鳥の英雄叙事詩 『雀のテルジェーの子スルジェーの物語』について

D. 塔亜

1. 作品の紹介

1.1. 二種の異本の存在

この叙事詩には二種類のヴァリエントがある。一つは雑誌『ハーン・テンゲリ』の1985年第4号にトド・モンゴル文字(西モンゴルの方言を写すために1648年に改良されたモンゴル文字)で掲載されたテキストで①、全4章、韻文形式(不規則に押韻する)で2,301行に及んでいる。採録の年月、編者の名前は記録されていない。もう一つは、1998年2月25日に中国新疆・ホボクサイリ県・ホボク鎮で録音されたテープで、こちらは章に分かれておらず、基本的には散文形式であるが、部分的に韻文形式の箇所がいくつかあり、メロディーはなく、長さは全部で60分である。内容に関しては、前者のテキストと大体同じだが、かなり簡略化されている。

1.2. 語り手

語り手はいずれも中国新疆・ホボクサイリ県出身のジャンガルチ(モンゴル民族の英雄叙事詩『ジャンガル』の語り手)ジョーナイ氏(1924-)である。現在までこの叙事詩についての研究は行われていない。そこで、以下にこの叙事詩について、現在私の進めている研究のあらましを述べて、皆様の御教示を頂きたいと思う。以下、この叙事詩のタイトルを『鳥』と略す。

1.3. 叙事詩の梗概

第一章: 雀のスルジェーの物語

1. 昔々、力の強い鳥達が数の多い、小さい雀達を苦しめる。
2. 天の加護により、雀のテルジェーの子、スルジェーが生まれる。
3. 雀のスルジェーは全ての雀を集め、平和に暮らせる方法について話し合う会議を開く。
4. 強い鳥達は無理やり会議に入ってきて、その会議を鳥のハーンを選ぶ会議に変えてしまう。
5. 強い鳥達はそれぞれ自分がハーンになりたいというが、スルジェーはそれに反対し、カッコウを鳥のハーンにするべきだと主張する。他の鳥達はそれに同意する。
6. カッコウが鳥のハーンに即位し、まつりごとについて沈思黙考しているうちに、季節の変わり目を告げ知らせることを忘れてしまう。

7. 権力の奪い合いに参加した99羽の鳥が集まって、ガルーダに鳥のハーンの位についてもらうことを決め、カッコウが神経症になったというデマを流す。

第二章：雀の戦争

1. ガルーダが鳥のハーンの位につく。
2. ガルーダとその臣下が雀を苦しめ、ガルーダはスルジェーを捕まえる命令を下す。
3. ガルーダから命令を受けたオオタカは、スルジェーを捕まえる。
4. しかし、スルジェーは策略をめぐらせ、オオタカの爪の中から逃れ出る。
5. スルジェーはツバメが暮らしている、海に突き出た絶壁が戦争に有利だと考え、巧妙な手段で自分の住みかとツバメの住みかを交換する。
6. ガルーダは大勢の軍隊で雀達を3回攻撃するが、失敗して自分も傷を負い、捕まる。
7. 雀達が皆で元の住みかへ帰る。

第三章：鳥（カッコウ）のハーン即位の宴会

1. スルジェーの勝利を聞いたカッコウは、コウモリにスルジェーへの手紙を託す。
2. スルジェーはコウモリに返礼の手紙を託し、全ての鳥の出席する会議を開くことを決める。
3. 会議でスルジェーはカッコウを再び鳥のハーンに即位させる。
4. カッコウはガルーダを厳しく断罪する。
5. 鳥のハーンとなったカッコウは、スルジェーやガルーダや他の鳥に官位を与える。
6. カッコウのハーン即位の祝宴をして、その後、それぞれの鳥は自分の住みかに帰り、平和に暮らす。

第四章：鳥達と羅護との戦い

1. 70年後、鳥のハーンから突然、全ての鳥を早く集めるようにという命令が下る。
2. スルジェーが全ての鳥に、羅護という大きな蜘蛛が雁の呪文の力で天上に昇って、全世界を食べようとしていることを知らせる。
3. 全ての鳥は戦争の準備をする。
4. 全ての鳥は戦争に行き、羅護を真っ二つに切り、臀部を捕まえて火をつけて燃やしたが、胸部は逃げて見つからず、そのまま帰ってくる。
5. 雁は厳しく断罪される。
6. 全ての鳥は害になる虫や動物を食べるなど、世界にとって有益な行いをする。
7. 羅護の胸部が太陽と月を食べるとき、日蝕と月蝕が起こるようになる。

2. 『鳥』とその他の動物の英雄叙事詩との関係

その他の動物の英雄叙事詩とは研究者の間ではよく知られている『24に枝分かれた角のある赤褐色の4歳の牡鹿』②と『白い牝ラクダの子、孤児の白い仔ラクダ』③という二つの叙事詩をここでは指している。以下、この二つの叙事詩をそれぞれ『シカ』『ラクダ』と略す。

2.1. 類似点

類似点としては当然のことながら、いずれも動物が主人公とされていることを指摘できる。また、作品の形式はいずれも韻文形式の長い叙事詩である。

2.2. 相異点

2.2.1. 語りの視点

『シカ』と『ラクダ』では、語り手が人間と動物の境界から双方の世界を見渡し、人間と動物をそれぞれいわばそれらしい特徴を持つものとして描いている。

これに対し、『鳥』では、語り手は叙事詩の中の出来事を、動物の世界の中での出来事のように描きつつ、人間を鳥類の仲間と同じレベルにおいている。さらに、『鳥』の語り手は、動物の性格、外見、知恵などに注目する一方で、人間をハーン、英雄、ラクダ飼いなどの様に細かく区別せずに「二本足の生き物」といういわば「総称」で指し、叙事詩における鳥以外の動物と同じレベルにおいている。つまり、人間の思考の外の空間から人間を見たかのように描いているのである。

2.2.2. 人間と動物の関係

『シカ』と『ラクダ』においては、動物と人間の対立を反映し、人間を「悪」の体现者として見ている。これに対し、『鳥』では、動物の世界の内部対立(強い鳥と弱い鳥の権力争い、又、鳥達と鳥のマンガス④である羅護との戦い)を反映し、人間を味方として描いている。これはあるいは人間世界内部のハーンの位をめぐる争いを動物の姿に反映させたと解釈することもできるが、むしろ人間と動物の友好的関係を表しているという点で、他の二つの叙事詩に比べ特徴的といえる。たとえば、「生き物の中の宝のような人間」といい、自分たちの勝利さえ「この世の人間と連携したおかげである」といったり、あるいは「鳥のマンガス」をも人と協力して倒している。

2.2.3. 物語中の「英雄的」要素

『シカ』では、猟師のフルディ・メルゲンが、最後に赤褐色の4歳の牡鹿を射ようとしてやってきた時に、鹿は逃げのびることができたはずだが、わざと逃げずに彼の前に姿を現わし、「遺言」をのこして射たれて死ぬ。また、『ラクダ』では、白い牝ラクダがめくらのラクダ飼いの隠れた寺を破壊

し、ネズミに変身したラクダ飼いを踏みつぶして殺すが、それ以外には「英雄的」出来事は殆ど見出されない。

一方、『鳥』では、雀のスルジェーがガルーダの命令で自分を捕まえて行くオオタカの嘴を折り、力の強さでハーンとなったガルーダの三度の攻撃を見事にはね返す、また、妖怪のやからと手を組んだ「鳥のマングス」(羅護)を「人」の助けで滅ぼすなど、英雄叙事詩のテーマの一つである戦いの要素がより多く見られる。

3. 『鳥』とモンゴル民族の人間の英雄叙事詩との関係

3.1. 共通点

モンゴル民族の人間の英雄叙事詩では、強い英雄がハーンの位につく、又は、弱いハーンが強い英雄の援助によってハーンの位につく、という二種類のパターンがあるようだ。『鳥』は、上の二つのパターンと比較すると、後者のパターンと一致している。そこで若干の叙述をこのパターンに分類されるホルチンの英雄叙事詩『ドシバルト・バートル』⑤と比較すると、次のようになる。

『鳥』	『ドシバルト・バートル』
1. 強い鳥が弱い鳥を脅かす	マングスが人間を脅かす
2. 天の加護でスルジェーが生まれる	天がトゥグスチョクトとドシバルトの二人を地上に送り込む
3. カッコウがハーンになり、スルジェーが大臣になる	トゥグスチョクトがハーンになり、ドシバルトが大臣になる
4. ガルーダがハーンになり、弱い鳥達が苦しむ	マングスがハーンの妃を奪い、ハーンが苦しむ
5. スルジェーがオオタカに捕まる	ドシバルトが二度マングスに捕まる
6. スルジェーが知恵を出して逃げる	ドシバルトが他者の助けでマングスの国から助け出される
7. スルジェーがガルーダを負かす	ドシバルトがマングスを倒す
8. カッコウが再びハーンになり、全ての鳥に平和がもたらされる	ハーンが妃と再会し、幸せになる

以上の比較から見て、『鳥』はモンゴル民族の人間の英雄叙事詩中の出来事とほぼ一致していることは明らかである。さらに「青白い岩」「波打つ海」「外海」などのモンゴルの叙事詩にしばしば現れる地形の名称や、「良き日を待ち／ある吉日をその日と定めて」とか、「外側で39度叩頭し／内側で49度ひざまづいて」「悪敵を倒した／祝宴をはじめたそうな」などの定型的表現、独特の描写と同様なものが見られる。

又、『鳥』の中で特に鳥が戦争をするなど、もちろん現実にはあり得ないことであるが、型としては人間が主役の英雄叙事詩と類似していることから、人間の生活の上での対立・矛盾が叙事詩

の空間に鳥同士の対立・矛盾として反映されたものかもしれないとも考えられる。

3.2. 相異点

3.2.1. ハーンとなる人物の特徴

モンゴル民族の人間の英雄叙事詩によれば、天命で生まれた英雄、又は強い英雄こそがハーンになる権利を持つ。ところが『鳥』では、これとは反対ともいえる筋書きが展開される。つまり、小さな雀達によるハーンの選出が、全ての鳥によるハーンの選出に変わり、強大な力を持つガルーダや、「天の偉大な加護により現れた」雀のスルジェーではなく、おとなしくかよわく、罪のない鳥といわれるカッコウをハーンの位につけているのである。これは、上に述べた人間の英雄叙事詩の思考の典型を破り、力の弱い下層の出身のものにも選挙を通じて、ハーンの位につく可能性があるという新奇な思想の方向を述べており、人は皆「平等」であるとか「民主主義」を尊重する、という現代的な思想の方向性を表している。

3.2.2. 「力」と「知恵」の位置づけ

モンゴル民族の人間の英雄叙事詩では、偉大な英雄の力(肉体的・物理的力と魔力)を主にたたえ、知恵については副次的な位置づけにとどめて描いている。特にオイラト・モンゴル族の叙事詩は文字どおり「力」の称賛となっている。ところが『鳥』では、鳥の世界の中で最も弱い雀を主人公とし、その外見を本来の自然的特徴によって描きつつ、知恵の側面では、ある意味では人間を超えるほどのものとして語っている。たとえば、スルジェーは山頂で凍えていた雀達に、山の南側に移れば暖かいといたり、強者の抑圧を防ぐ為に、慈悲深いハーンを選び出す必要があると提案する。また、雀の一族の利益から、最終的には全鳥類の利益を考えるにいたる。さらにハーンの位をねらった99羽の強い鳥を知恵でやりこめ、ガルーダのもとに連れていこうとスルジェーを捕まえて飛んでいたオオタカの爪から機智でのがれている。あるいは、戦いに有利なツバメの巣を策略を用いて取り替えてもらったり、知恵を働かせて作り出した要塞で強い鳥の攻撃をはね返す。さらに戦争の後、「我々は敵を鎮圧したが、又裏切る危険がある」と仲間達に注意を呼びかけたり、戦争の勝因を「親愛なる皆の知恵」のおかげだというなど、叙事詩の中の出来事すべてが、「見れば小さいが／勇気は大きい／小さな体でも／大いなる知恵ある」スルジェーの知恵を糸口として解決に向かっていくのである。特に鳥のハーンのカッコウも、「一万羽の鳥のまつりごとをとどまることなくおこし、スルジェーの知恵を戒めとして守ろう」とスルジェーの知恵を高く評価するのである。

このように、主に知恵への讃辞を述べ、「力」を副次的に位置づけたことが、人間の英雄叙事詩と異なる。

3.2.3. 人間・鳥・マンガスの対立と協力の構図

モンゴル民族の人間の英雄叙事詩では、英雄とマンガスの間の対立を表し、鳥をその協力者として描いている。これに対し『鳥』では、その反対に鳥と、鳥のマンガスの間の対立を表し、人間をその協力者として位置づけている。

4. 『鳥』と民話の関係

4.1. 『雀のテルジェーの物語』との関係

4.1.1. 作品の紹介

『雀のテルジェーの物語』は、散文形式の約900字の作品で、編者はバドマ。『鳥』と同じ雑誌の同じ号に掲載された⑥。語り手の名前、採録の場所、年月日などは不祥。(これを以下『テルジェー』と略す)

4.1.2. 作品の梗概

1. 昔々、鳥のハーンはガルダであった。
2. ガルダの妃はガルダに鳥と魚を材料にして、宮殿を建てるという提案をする。
3. ガルダは妃の提案を承知して、全ての鳥と魚を集めたが、その時、雀のテルジェーはいなかった。
4. ガルダから命令を受けたオオタカはテルジェーを捕まえる。
5. テルジェーは策略をめぐらせて、オオタカの爪の中から逃げたが、三日後、再び捕まる。
6. ガルダはテルジェーに来なかった理由を尋ねると、テルジェーは三日間に三つのことを思いついたと言った。その三つのこととは、
 - (1)曇りの日を夜として数えれば、昼より夜の方が多くなった。
 - (2)寝ている人を死んだ人として数えれば、生きている人より死んだ人の方が多くなった。
 - (3)妻のいいなりになった男を女として数えれば、男より女の方が多くなった。
7. ガルダは女として数えられたので恥ずかしくなって、全ての鳥と魚を解放した。テルジェーに対しては、それまで渡り鳥だったが、渡りを禁じて足枷をはめたので、テルジェーは歩くことができず、ピョンピョンと跳ねていくようになった。それから、雀は皆ピョンピョンと跳ねていくようになったという。

4.1.3. 『鳥』と『テルジェー』の共通点

『鳥』と『テルジェー』を比較すると、以下の四つの共通点が指摘できる。

- A. 主な登場人物が雀である。
- B. 主な対立の構図が弱い鳥と強い鳥の対立、すなわち、雀とガルードの対立である。
- C. 結果の一部として、弱者が強者を知恵で負かす。すなわち、『鳥』ではスルジェーがガルードのハーン即位を覆し、『テルジェー』ではテルジェーがガルードをやりこめる。
- D. 「ガルードから命令を受けたオオカが雀を捕まえる」というモチーフと、「雀が策略をめぐらせてオオカタの爪の中から逃げる」というモチーフが両方に見られる。

4.1.4. 『鳥』と『テルジェー』の連続的な部分

内容的な前後の連続関係として、父親の物語が息子の物語に移行する。すなわち、父親のテルジェーがガルードと対立した物語から、息子のスルジェーがガルードと対立した物語につながる。

また、原因と結果の関係を考えると、ガルードが雀に危害を加えたため、雀が報復したといえる。

4.1.5. 『鳥』と『テルジェー』の相異点

相異点として次の三つが挙げられる。

- A. 作品の形式は、『鳥』が四章から成る韻文形式の叙事詩であるのに対し、『テルジェー』はごく短い民話である。
- B. 結果の一部が異なる。『鳥』では弱者が力(知恵を含む)で強者を負かした、すなわち、弱い雀が力と知恵で強いガルードの攻撃をはね返し、逆にガルードを捕虜にしたが、『テルジェー』では強い者が力で弱者を負かした、すなわち、テルジェーが力でガルードに対して対抗できず、強いガルードが弱い雀を罰した。
- C. 以上の結果の裏返しとして、『鳥』では強者は力で弱者を負かすことはできないが、『テルジェー』では弱者は力で強者を負かすことはできないといえることができる。

4.1.6. 相異点の生じた原因についての仮説(『鳥』と『テルジェー』を二つで一つの完全な叙事詩あるいは説話と考えた場合)

現実の生活空間と説話の空間においては、強者は力で弱者を負かし、弱者は知恵で強者を負かすという二つの原理があり、弱者が力で強者を負かす場合は稀である。ところが、叙事詩の空間では弱者が力で強者を負かす(例えば漢垂れ小僧がマンガスを負かす)可能性が高い。それ故、雀がガルードへの報復を果たそうという場合、説話の空間から叙事詩の空間に移行する必要があるのではないと思われる。

説話から叙事詩への移行条件としては、弱者に超自然力を持たせる(雀のスルジェーが天の加護により生まれる)ことが挙げられる。

4.2. 『鳥』とその他の関連のある鳥(あるいは動物)の説話との関係

4.2.1. 共通点

- A. 若干のモンゴルの説話では現在の鳥のハーンはカッコウであるという。⑦
- B. 羅護が日月を飲み込むために日蝕、月蝕が起こるようになったという。⑧⑨⑩
- C. クジャクがニワトリの美しい衣装(羽毛)を騙しとってしまう。⑪

4.2.2. 相異点

- A. ツバメと人間との友好的関係の理由について: 『鳥』ではツバメと人間が友好的関係になった原因を、スルジェーの「策略」によるとしている。ところが、他の説話では次のように説明している。新疆のオイラト・モンゴルの『ツバメの話』⑫という民話では、その原因を、ツバメが羅護の網を切って人間を救ったためだという。また、内モンゴルの「蜜蜂が口をきけなくなったわけ」という民話では、蜜蜂がマングスの命令で、全ての生き物の中で最も血が美味しいものを調べ、それは人間だと報告しに行く。それをツバメが知り、蜜蜂の舌を切ったため、人間と仲良くなったのだという。⑬
- B. ガルーダについて: 『鳥』では、ガルーダは力で全鳥類のハーンになろうとして、結局はハーンになれなかったが、インドの説話⑭及び若干のモンゴルの説話⑮では、ガルーダを鳥のハーンであるという。特に『テルジェー』が「昔々、鳥のハーンはガルーダであった」で始まるのは面白い。また、『鳥』では、鳥のハーンであるカッコウがガルーダを罰したが、若干のモンゴルの説話では、お釈迦様がガルーダを罰したという。⑯
- C. 羅護について: 『鳥』においては、羅護が雁の呪文の力で天に昇ったと述べている一方で、若干のモンゴルの説話では、お釈迦様の失敗が原因で羅護が天上に昇ったと述べている。⑰ また、『鳥』では、鳥達が羅護を真っ二つに切って、胸部と臀部に分かれたと述べているが、若干のモンゴルの説話では、お釈迦様が羅護を叩き切ったと述べている。⑱⑲
このように、全世界に危機をもたらした羅護についても、『鳥』は他の民話や伝説とは一致しない。

4.2.3. 相異点の生じた原因についての仮説

以上述べてきた通り、説話の空間から叙事詩の空間に移行するためと考えられる。また、敵側の主役を強調するためとも考えられよう。

5. まとめ

以上のように、この叙事詩はモンゴル民族の他の動物の英雄叙事詩、人間の英雄叙事詩、及び神話との伝統を継承する関係にはあるが、独自の特徴をもつ興味深い叙事詩であるので、今後更なる研究が必要とされるだろう。

最後にもう一つだけ指摘しておきたい。『鳥』における小さなスルジェーが、強者を怖れずに99羽の強い鳥と知恵を競い、真理と知恵によって勝ったという叙述は、モンゴル民族の英雄叙事詩よりも、むしろ古い書写文学といわれる『チンギスの九将と孤児の知恵比べの伝記』の孤児の少年を想起させるものである。

註(引用文献)

- ①⑥雑誌《Хаан тэнгэр》(トド・モンゴル文字)1985年. № 4. 中国. 新疆人民出版社. 1985年. p.101-237, p.238-242.
- ②Б.Катуу. 《Торгууд захчин ардын тууль-үлгэр》(キリル・モンゴル文字) Ховд-Хот. 1990. p.136-144.
- ③Б.Катуу. 《Дуутай мөндөр》(キリル・モンゴル文字) Улаанбаатар. 1989. p.83-101.
- ④マングスとは、モンゴルの英雄叙事詩に登場する、英雄の敵である。
- ⑤Дорунга他編 《Дошбалт баатар》(旧モンゴル文字) 中国. 民族出版社. 1982年.
- ⑦『カッコウとカササギの話』(筆者が幼少時に祖母から聞いた話)
- ⑧⑨「なぜ月食が起こるようになったか」雑誌《Хаан тэнгэр》(トド・モンゴル文字)1988年. № 1. p.60.
- ⑨「須弥山の洞穴でお釈迦様が修行をなさった話」雑誌《Хаан тэнгэр》(トド・モンゴル文字) 1989年. № 4. p.21.
- ⑩⑪⑫「日蝕・月蝕はなぜ起こるのか」《Сааль Мэргэн болон Саадаг Мэргэн》(旧モンゴル文字) Б.Дамиринжав, Улаантуяа編. 中国. 民族出版社. 1996年. p. 655.
- ⑪「鶏が夜明けに時を告げるようになったわけ」《Монгол ардын үлгэр》(キリル・モンゴル文字)Цэрэнсодном編. 国营出版所. Улаанбаатар. 1982年. p.45.
- ⑫『ツバメの話』(筆者が幼少時に祖母から聞いた話)
- ⑬「蜜蜂が口をきけなくなったわけ」《Монгол ардын домог үлгэрүүд》(旧モンゴル文字) Дуузая, Гова編. 中国. 民族出版社. 1984年. p.312.
- ⑭原山煌『モンゴルの神話・伝説』東方書店. 1995年.

- ⑮ **Баяр**編 《**Ордосын аман үлгэр**》(旧モンゴル文字) 中国. 内モンゴル人民出版社. 1990 年.
p.309.
- ⑯ 「お釈迦様がハン・ガルーダを従えた話」 雑誌《**Хаан тэнгэр**》(トド・モンゴル文字) 1989 年.
№ 2. p.73.

(だわー たやー・中国内モンゴル大学モンゴル学研究院在職博士課程)